

教育委員会会議録

令和3年（2021年）7月定例教育委員会会議

| | | | |
|---------|--|--|--|
| 開 会 日 | 令和3年（2021年）7月29日（木） | | |
| 開 会 時 間 | 午後2時00分 ～ 6時30分 | | |
| 開 会 場 所 | 熊本市役所議会棟2階 予算決算委員会室 | | |
| 出 席 者 | 委 員 会 | 遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員 | |
| | 事 務 局 | 松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他 | |
| 提 出 議 案 | <p>議第54号 令和3年度熊本市一般会計補正予算（9月補正予算）について</p> <p>議第55号 令和2年度熊本市各会計決算について</p> <p>議第56号 令和3年度（2021年度）熊本市教育委員会事務事業点検評価報告書「令和2年度（2020年度）事業分」について</p> <p>議第57号 職員の懲戒処分について</p> <p>議第58号 令和4年度（2022年度）熊本市立特別支援学校等教科用図書の採択について</p> <p>議第59号 財産の取得について</p> <p>議第60号 熊本市学校給食運営協議会の委員の委嘱について</p> <p>議第61号 和解の成立について</p> <p>議第62号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について</p> <p>議第63号 和解の成立について</p> | | |
| 報 告 | <p>(1) 令和3年第2回定例市議会報告について</p> <p>(2) 公益財団法人熊本市学校給食会の経営状況について</p> <p>(3) 市立高等学校・専門学校改革基本計画に係る必由館高等学校提案について</p> | | |
| 署 名 | 西山 忠男 | | |
| | 苫野 一徳 | | |
| 会議録作成者 | 教育政策課 木村三恵 | | |

〔開会の宣告〕

遠藤洋路 教育長

令和3年7月定例教育委員会会議を開会いたします。

〔会議の成立〕

遠藤洋路 教育長

本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。
会議録署名人は、西山委員と苫野委員とします。

〔公開の審議〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、本日の議事のうち、議第54号 令和3年度熊本市一般会計補正予算(9月補正予算)について及び議第55号 令和2年度熊本市各会計決算について及び議第59号 財産の取得については、会議規則第13条第2号「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」に該当すること、議第57号 職員の懲戒処分については、会議規則第13条第1号「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」に該当すること、また、議第61号 和解の成立について及び議第63号 和解の成立については、会議規則第13条第3号「訴訟、調停、和解及び不服申立てに関する案件」の非公開事由に該当することから、非公開の審議が適当と思いますがいかがでしょうか。

議第54号、議第55号、議第57号、議第59号、議第61号及び議第63号につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。

(全員挙手)

遠藤洋路 教育長

全員賛成により、議第54号、議第55号、議第57号、議第59号、議第61号及び議第63号は、非公開とします。

日程第1 前回会議録承認

遠藤洋路 教育長

6月24日開催の令和3年6月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録等を承認することに、ご異議はありますか。

(異議なしの声)

異議なしと認め、前回会議録を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

(1) 事業・行事等報告について

- 前回定例会議(R3.6.24)以降の事業・行事報告

○ 今後の予定

日程第3 議事

- ・議第56号 令和3年度（2021年度）熊本市教育委員会事務事業点検評価報告書《令和2年度（2020年度）事業分》について

《中元正人 教育政策課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

16ページに不登校に関連して夜間中学のことが意見として出されています。おとといの総合教育会議で夜間中学のことを議論したばかりなんですけれども、おとといの議論では夜間中学の性格として、外国人に対する日本語教育、これについては議論があったところですが、そういう側面が1つあるのと、中学を何らかの事情で卒業できなかった人の再学習の機会を与えるというようなことが夜間中学の主たる目的とされていたと思いますけれども、ここでは現役の小中学生の不登校に対する受皿として考えてはどうかという意見ではないかと思いますが、このあたりどう考えるのか。今後、夜間中学の議論を進めていくうえで、いろんな夜間中学の役割がここに出てきちゃうわけですね。どの辺に注目して成立させていくのかということが大事になるかと思いますが、そのあたりはどう考えたらいいんでしょうか。

松島孝司 教育次長

夜間中学校は様々な可能性があると思われているところがございます。他県では外国人の方々の日本語学習が多くウエイトを占めているという現状はあると思いますが、やりようによっては様々な役割があるのではないかと認識しているところがございます。今後、その辺も含めて県としっかり検討していく必要があると考えております。

西山忠男 委員

先日、夜間中学の設置を文科省から勧められたわけなんですけれども、やはりどれぐらいニーズがあるのかというのをしっかり把握することが大事じゃないかなと思うんですね。外国人の人で、もし熊本市内にそういったものにどれぐらいの人が来そうなのか、それから中学を何らかの事情で卒業できなかった人がどれぐらいいるのか。そういったリモート協議でできるのかという議論もありましたので、県内に3,000人いらっしゃるということですが、市内に何人くらいいるのかそれを把握しないとイケないと思います。

それからやはりここで議論になっている現役の小中学生への不登校の受皿になり得るのか、現在ではいろんなスクールとか、塾とか、不登校の小中連携をしていると思うんですけれども、そのあたりの兼ね合いをどう考えるのか非常に難しい問題がたくさんあると思うので、しっかり議論していければと思います。よろしくお願いします。

| | |
|--------------|--|
| 遠藤洋路 教育長 | <p>このページに書いてあるのは、夜間中学も議論があったけれども、これからは不登校児童生徒に対する社会の受皿としてフリースクールの役割や位置づけなどを考えていく必要があるかと思えますという意見です。夜間中学もありますけれども、フリースクールも役割として果たせる面があるんじゃないかということだと思います。</p> <p>現役の小学生、中学生の不登校生に関しては、フリースクールというのは一つの今行き先にはなっていて、学校の連携ということは教育委員会としても進めているところですが、役割をどう、夜間中学校、フリースクール、その他の例も考えていこうかということは、これから議論は必要かなと思っています。</p> <p>フリースクールに関して進捗がありましたら。</p> |
| 田口清行 青少年教育課長 | <p>青少年教育課に地域教育班というのをつくってございまして、現在、フリースクールとの関係づくりということで、各市内、また、市の関係の児童生徒が通っておりますフリースクール等にも伺って、その状況等の把握に努めております。</p> <p>また、昨年度はEducation Weekの中でフリースクールの方々と今後について様々な意見交換を行い、また今年度もそのようなかたちができないかということでやっております。子どもたちの通う姿のほうも見せていただきながら、今後どのように関わっていくかということをしつかり検討してまいりたいと思えます。</p> |
| 苫野一徳 委員 | <p>今の件に関して、熊本市内の不登校児童生徒の数と、それからフリースクールはその受皿として十分機能しているのか、足りているのか等々、分かる範囲で教えていただけますでしょうか。</p> |
| 川上敬士 総合支援課長 | <p>まず、本市の不登校の現状は、令和2年度は、小学校が508人、中学校が1,034人、合わせて1,542人という状況になっております。また、令和2年度の調査では、フリースクールに通っている子どもたちの人数は、小学生で約60人、中学生で80人程度という状況になっております。</p> <p>フリースクールで不登校たちの受皿が足りているのかというところですが、県内には20近くのフリースクールがありますが、熊本市内でこの1,500人近くの不登校児童生徒全員とは言わなくても、受皿になっているかというところ、十分ではないところはあると思えます。ただフリースクールというのはどうしても有料ですので、経済的な負担が大きいというところで、今、教育委員会で取り組んでおりますのが、タブレットを使った、教育ICTを活用した学習支援校です。本荘小学校と芳野中学校を拠点校として、そこに人材と機材等を準備してオンライン上でできる、どちらかというフリースクールに近いものです。ただし、学習を保障するためにきちんと一人一人に合った個別のカリキュラムを組んで支援していこうと今計画しております。</p> <p>9月から学習体験を行う予定にしておりますが、今日現在で約30名程度の申込みがあり、小学生が26名、中学生が6名</p> |

苦野一徳 委員

の申込みが来ているところです。不登校の支援というところで、1か所で全部を受皿ということはできませんので、不登校になった子どもたちにいろんな選択肢がある、そういう状況を市全体としてフリースクールも含めて今後進めていきたいと考えております。

詳細な情報をありがとうございました。

この前、夜間中学のときのご説明にもあった教育機会確保法の話で、自治体としてはある種の努力義務というか、話していく必要があるわけですが、経済的な支援なんかになってくるとますます大変なことになりますので、努力目標として考えるのも1つだと思うんですが、圧倒的に足りていないんだなということを考えると、これだけ教育の機会から取りこぼされてしまいかねない子どもたちがいるというのは、やはり早急に対応を、かなり優先的に、もちろん学校へ戻すということが第一位じゃ全くありませんで、今おっしゃったように、教育の機会を様々なかたちで確保していくということが必要だと思うんです。オンライン授業等々がそれに有効だということは分かってきたんですけれども、非常に大事なことだと思いますので、これも予算のかかることですが、岐阜市の不登校特例校、草潤中学校というのはとても今話題になったんですけれども、不登校になった子どもたちがすごく通いやすい、とても選択の余地があり、自由度が高くて、居心地のいい空間をつくって、徹底的にそう考えてつくった学校が今とても話題ですが、不登校特例校のようなものも1つ案としてはあっていいのではないかなという。

現実問題、そこはしっかりと調査しないといけないと思いますけれども、この前、義務教育学校のお話もあったので、あれが廃校になる、廃校というか、使われなくなる校舎がある。そういったものも、もしかしたら有効活用しながら特例校のようなものもアイデアとして、選択肢の1つとして頭の中にあってもいいんじゃないかなというような感じがしているところです。

遠藤洋路 教育長

不登校の児童生徒が本当に市内で、今の説明では1,500人ぐらいいて、フリースクールに通っているのが約140人ぐらい、1割ぐらいですかね。あとオンラインとか、そういったサポートを受けるといふふうにして、足りないという状態なのか。つまりフリースクールに行きたい人がいっぱいいるけれども、定員で入れないという状態なのか、それともフリースクールを希望している人は大体行っているのか。フリースクールもそれぞれ不登校の受皿ですよということをやっているところもあるかもしれませんが、それぞれの独自の取組、方針で運営されているし、必ずしも不登校の人がみんなフリースクールに行きたいというわけではないでしょうから、まずどのぐらいのどこかに行きたくても行けないという子どもがいるのかということなのか。

それから、そうじゃないとしたらどんなものが。フリースクールにも行っていない、オンラインで教育を受けるといふものもないという人は、どんな学習の方法が一番いいのかという選

択肢を増やしていくということが大事だと思います。

そういう意味では、苫野委員が今おっしゃったような不登校のための特例校とか、それも選択肢としては、ひとつ有益なものなんだろうなというふうに思います。1,500人という人数を考えたときには、大多数がどこにも多分そういうことは、サポートを直接は受けていないということ、他にどんな選択肢があるかなと、どこの特例校もさすがに1,000人規模の学校でしているわけじゃなくて、小規模でしょうから。数でいうと多分そんなに全体をカバーするようなものじゃないですね。

その他、苫野委員、お詳しいと思うので聞きたいんですけども、数でいうとどんな受皿というのがあり得るんですかね。

苫野一徳 委員

特例校はそんなに多くなかったと思うんですよね。数十ぐらいだったんじゃないかと思うんですけども、長い目で考えると波及効果を考えられるんじゃないかと思うんですね。そういう子どもたちにとってとても居心地のいい学校づくりとか、空間づくり、学びの場づくりというものがこんなふうになり得るんだなということが分かってくると、学校全体を市内の学校全部がそういったものを参考にしていけば、そもそも不登校にならないように包摂していくことができる、そういった長い目の1つの起爆剤ということは可能なのかなと。

あとは、広島なんかでもやっているような校内のフリースクールも可能ですね。例えば特例校なんかを参考にしながら校内に、今もこの前、いくつか中学校を見に行ったときにそういった部屋がある学校もありましたけれども、そういったものを充実させていって、ここだったら安心して通えるなというような場所を各学校の中により充実させていくような、そういう仕方もあるのかなというふうには思います。

もちろん1,500人の中でも、むしろホームスクーリングでやりたいとか、もう学校なるものに全く関わりたくないというような子どもたちや家庭もあるかとは思いますが、全部が全部その中に入れなきゃいけないということはないんですけども、そういった選択肢、長い目で見た波及効果、そういったものを考えていくのは市として必要なのかなと。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございました。

泉薫子 委員

不登校の子どもたちを集めてデイケアをやっているんですけども、そういう子どもたちを見ていると、やはり人との関わりは何らかのかたちで続けていったほうが、その先の人生の先の状態がいいなというふうに感じているんですが、今回のこの意見の中に地域との連携というのをこれからしっかり考えてほしいという意見があったところで、地域の中にこれだけの数の不登校が増えてきたということは、地域地域でその受皿を考えることができないのかなとずっと感じていて、公民館機能ですとか、そういったいろんな地域にあるいろんな資源を利用して、子どもたちをそういったところに人と関わる機会を増やしてあげられるというような、何かそういった取組はできないのかなというのを個人的に考えているんですけども、いかがでしょうか。

田口清行 青少年教育
課長

先ほどの地域教育班ということで、フリースクールももちろんなんですけれども、地域の中で子どもたち、どのような居場所ということで、居場所づくりをどのようにつくるかということで今検討しております。

ただ現在、このようなものをということはなかなかお答えすることは難しいところもあるんですが、実際に地域の中で子どもたち、放課後の時間ですとか学習を見ていただいたり、また、生活の部分で活動していただいたりというふうなことも聞こえてはきておりますので、そういう学校、地域を参考にしながら、またそういうところをできるだけ紹介しながら広げていければというようなことも今検討しているところでございます。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。

泉薫子 委員

ぜひよろしく願いいたします。

川上敬士 総合支援課長

今、教育相談室に適応指導教室がございますが、なかなか適応指導教室に来る子どもさんが少ない状況です。体験には来るんだけど、実際に入所につながらないということが近年見られたので、現在、教育相談室で行っているのが出前授業みたいな、学校の別室登校をしている子どもたちに教育相談室の適応指導教室の職員が出向いて学習を教えたり、いろいろな創作活動等、そういったものに取り組んでいます。場所とお世話をする職員が確保できるのであれば、そういう適応指導教室の分教室のようなものを各区につくれば、非常に受皿は広がるかなということを思っています。

ただ一度、子飼にあるフリースクールに行ったんですけれども、子飼に来ている子どもたちというのは、ほとんど校区の子ではなくて、遠いところからバスに乗っていきます。理由は、地域のフリースクールに行くと、自分が不登校でそこに行っているということが分かることに抵抗感があるということで、増やせば自分の住む隣の地域の適応指導教室の分教室に通っていく子は出てくるのかなと思います。場所の確保については青少年教育課とも相談しながら、確保できればあとは人をどう配置していくかということで検討ができるのかなとは思っております。

泉薫子 委員

そのような配慮も非常にありがたい取組だと思います。

ただ、今、不登校に関する意識というのは大分変わっております。保護者の方の意見も大分変わってきていると思うので、不登校であることが非常に恥ずかしいことであるというふうな認識は大分薄れてきているのではないかと思いますし、そんなふうに学校、集団というものと離れて自分のことを考える時間というのは大事なことなんだという認識でもって、地域に受皿があるということがないと割といいのかなと思いますし、そのスタッフというのも地域の人材を活用するというのが、年齢問わず、高齢者の方を利用するというのは非常に多彩な触

| | |
|--------------------|---|
| | <p>れ合いができると思いますし、そういう教育者でなくてはいけないとかというふうにしなくて、できるだけ地域の人との触れ合いですとか、いろんな体験をしていく、内容も様々な教育だけに限らず、様々な体験をするということが大事ではないかなというふうに思いますので、広い視野で幅広く内容も多彩に考えていただけると、地域に密着した内容だったりいろいろあると思いますので、いいのかなというふうに考えます。よろしく願いいたします。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>ありがとうございます。</p> |
| <p>苫野一徳 委員</p> | <p>以前もこの委員会会議でお話をしたことがあるんですけども、子どもたち向け、保護者向けには適応指導教室という言葉は使っていないというふうなお話を聞いたことがあるんですけども、できれば委員会内部でもあまりこの言葉を使いたくないと思うんですよね。どうですかね。</p> <p>適応指導というのはすごく言葉が、文科省が使っている言葉です。何ともし難いところはあるのかもしれないんですけども、もし熊本市教育委員会ですらそういった名称を使わなくてもいいということができるようになれば、ありがたいかなと思うんですよね。適応指導、不登校の子に対して適応できないから適応するように指導するというのはやっぱり言葉が悪いなと思うんですよね。教育支援センターという言い方もあると思いますけれども、何かその辺を配慮したいなというふうに思うんですけれども、いかがでしょうか。</p> |
| <p>川上敬士 総合支援課長</p> | <p>一応こういう場では適応指導教室と呼んでおりますが、それぞれに名前が付いておりまして、教育相談室にある適応指導教室がフレンドリー、城南町にあります適応指導教室は火の君学級、それから植木にある適応指導教室がスクーリングアップと呼んでおります。</p> <p>フレンドリーといってもなかなか全部に浸透していないので、何かのネーミングを検討してもいいのかなと思います。市内に通用するような名前を考えてみたいと思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>名前を変えるというのは、変えようと思えばできると思うんです。何かいい案があれば。そういう変えるということは十分できます。</p> <p>ご意見よく分かりました。可能だったら来年度から別の名前、リニューアルということで考えてみてください。</p> <p>他によろしいですか。</p> |
| <p>小屋松徹彦 委員</p> | <p>要望が1つと、それから質問を1つしたいと思うんですけども、ページ数でいきますと、42/54ページですね。</p> <p>ここのご意見、令和2年度の意見の中に、下から3つ目の四角になりますけれども、「教員の働き方改革が急激に進められています。本当に教員の負担軽減になっているのでしょうか？数字だけではなく、現場の先生方の声を漏らすことなく、無理なく進めていただきたいと願います」というふうに書いていますけれども、当然学校現場の代表の方もこれに参加してい</p> |

| | |
|------------------|--|
| | <p>らっしゃいますので、現場の声は反映されているとは思うんですけども、この問いかけ自体が本当に教員の負担軽減に合っているのかというその点が、そういう視点は大事にしていけないといけないかなと思うので、このプロジェクト会議を進めるに当たっては、こういった視点というんですか、本当に教員の負担軽減に繋がるのかという視点は大事にしながら進めていただきたいというのが要望です。</p> <p>それからもう1点、その下の令和3年度の意見の中に、「今後は、「地域学校協働本部活動」等、新しい時代の「地域と学校の連携・協働」を踏まえた取組の推進について、教育委員会におけるご審議を期待しています」というふうに書いてありますけれども、この地域と学校の連携・協働というのは、例えば教育委員会では具体的にこういった取組とか、そういったイメージがおりなのかどうか、そこら辺教えていただきたいと思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>1点は要望ということで、2点目に関してはいかがですか。</p> |
| <p>松島孝司 教育次長</p> | <p>地域と学校の連携・協働という点につきましては、熊本市の場合には、自治会組織が小学校区と連動しているというところで、地域との連携は必然的に行われている状況という認識は持っております。例えば国が言うコミュニティスクール等、そういうところについては、正直なところ今から検討する余地はあるかと認識しております。ただ地域の人材活用や様々なボランティア等のシステムをいろいろ検討しているところであり、今後さらに地域と学校の連携・協働という点については、様々な検討が必要と考えております。</p> |
| <p>小屋松徹彦 委員</p> | <p>ありがとうございました。</p> <p>恐らく文科省が、ここに書いてある地域学校協働本部活動等というのは、もう少し地域の主体性といいますか、そういったものを期待しているのかなというふうなニュアンスは感じるんですけども、地域の現場を見ていますと、なかなかいろんな活動に携わる方々が減っていく傾向が強いですよね。そういう中であって地域と学校が協働してという、非常に最近そこがどうなんだろうということを感じているところがあるんですよね。だからこれは学校の問題というよりも、地域の問題が、少し疲れているといいますか、そういうふう感じて今後どうなっていくんだろうかと心配しながら質問しました。</p> |
| <p>苫野一徳 委員</p> | <p>今、小屋松委員がおっしゃった働き方改革に関連してなんですけれども、これはどうか管理職、校長先生方に徹底的に周知いただきたいと思っているんですが、教員をやっている学生からの又聞きですので、そのことが前提なんですけれども、かなり驚くぐらいの残業といいますか、学校内、こんな時間までいるのかというぐらいいるんですよね。心身を病んでいる、もうもたないんじゃないかという声を複数聞きまして、これは非常に校長の問題ではないかと私は思うんですけども。前回申し上げたように、教育委員会が形式的にできることはかなり限界までやってきたんじゃないかなという気がするんですね、シス</p> |

テムとしては。あとは本当に管理職の先生方にそこを徹底していただかないと、もう先生方は潰れちゃうんじゃないかなと。ここは本当に何とかならないものかなと。それをどうにかしてお願いしたいというふうに思っております。

それともう1点、これもいろんな現場の先生方からお聞きしたことなんですけれども、昨年から牛乳パックを各学校で洗うんですよね。これに非常にいろんな文句を聞きまして、先生方のところにも声があるんじゃないかと思うんですけれども、休み時間がなくなっちゃうと。低学年の子どもの場合、子どももできないので先生がやっていただいたりだとか、あと水道がない、足りないところは一人一人できないので給食当番の人がそれをやらざるを得なかったりする。そうすると子どもたちの休み時間がなくなったり、それを見ていなきゃいけない先生も休み時間がなくなってしまう。これは突然上から降ってきたと聞いたんですけれども、これはちょっとどうなのかなというのもあって、もう少しそこを、多分何かしらの事情があると思うんですけれども、これだけ働き方改革、教師の時間創造プログラムをやっているのに、それをよりちゃんと後押しできるような仕方で先生方を応援していきたいなというふうに思っていますので、そこを何がしかのかたちでご検討いただけたらありがたいなと思うんですけれども。

森江一史 教育次長兼
学校教育部長

ご指摘のように、まず校長が職員の在校時間をどれくらい把握しているかということにつきましては、教育委員会としても在校時間の削減に取り組み、目標を掲げております。きちんと退勤の打刻を正確にするということがどこまで徹底されているのかと、中には打刻して残っていると意味がありませんので、そのあたりを今徹底して、まず校長が全職員の在校時間の把握、また、残れないようなシステムづくりをするように努めてはいるんですが、そこが徹底しているのかどうかをこれからも注視していきたいと思っております。

上村清敬 健康教育課長

牛乳パックについてご説明いたします。

2018年に食品衛生法が改正されまして、それまでは牛乳のメーカーが牛乳を届けて、次の日には牛乳パックを回収してということをしておったんですけれども、その食品衛生法の改正に伴ってそれが衛生的に不適切ということになりましたので、牛乳メーカーが引き取らないという通知をこちらにしてみました。それに合わせまして、我々としてはどうすることができるとかということで考えました。そういう中で焼却する自治体もあるわけなんですけれども、熊本市の場合は事業系の紙は燃やさない、十数年以上前からそういう方針ですので燃やすことはできないということで、果たしてどのようにリサイクルするかということで、おっしゃられたとおり、現場から不平不満はたくさん聞こえてきています。そういう中でうまくやっている学校もありますので、うまくやれている工夫の仕方とかを全学校にお知らせしたり、また、物理的に洗い場が少な過ぎるといふ学校もありまして、そのような学校については、洗い場を増設するというようなことも1つの手法として解決している部分もあります。ただ、とは言いながらも、全学校がスム

| | |
|-----------|--|
| | <p>ーズにいけていないのは実情でありまして、何とか一緒になって我々も解決策を図っていきたいと考えておるところです。 以上です。</p> |
| 苦野一徳 委員 | <p>ありがとうございます。 まず、打刻に関しては、やはり聞くところでは全然守られていない学校がかなりあると。これは厳しくここは校長先生にしっかりと行っていかなきゃいけないんじゃないかなと。休日出勤も全然してしまうというか、そんなことがあってはならないと思いますので、その点は何とぞよろしく願いいたします。 牛乳パックの件、これは、事情はとでもよく分かりました。ありがとうございます。私も子どもに聞いたんですけども、自分たちは一人一人ではぱっとできるから全然何の問題もないと言っていたんですけども、ただ学校によってはそれがものすごく大きな負担になっているというのも言っていましたので、何か不平不満の理由は、突然上から降ってきたということなんですよね。なので、そこは丁寧に、一人一人の先生と丁寧にお話しするというのは難しいと思うんですけども、理解が得られるようなコミュニケーションなり、あるいはいきなり一律にというんじゃないくて、今おっしゃっていただいたようにできる環境を整えますからねというような優しいコメントを一言添えながらやっていただくと、先生たちもまた負担がみたいな感じにならずにいいんじゃないかと思っておりますので、その辺はコミュニケーションをぜひお願いできたらなと思いました。 ありがとうございました。</p> |
| 出川聖尚子 委員 | <p>43ページの学校教育と福祉の連携の推進のところ、対象外という項目が①、②、③、④とあるんですけども、例えば③の児童虐待の対応強化とかいうところは、学校でも何かできるのではないかなと思います。この部分はこちらのほうでは評価しないということになってはいますが、全く評価されていないのかお聞きしたいです。</p> |
| 遠藤洋路 教育長 | <p>これが対象外になっている理由ということですか。評価しないのかということ。いかがでしょうか。</p> |
| 松島孝司 教育次長 | <p>こちらに関しましては、基本方針は学校教育と福祉の連携ということで、例えば児童虐待だったら、児童相談所が主管として主に福祉部門が扱うところがメインでございますので、そういう趣旨で、ここはこのような「対象外」という取扱いになっていると認識しております。 ただおっしゃるとおり児童虐待の予兆等は、日頃から子どもたちと接している学校でこそよく見えるというのがございます。その点については学校でも児童相談所等の関係機関との連携をしっかりと図りながら取り組んでいますので、全くやっていないということではないんですが、制度上、形式上、対象外の取扱いになっているということでございます。</p> |
| 遠藤洋路 教育長 | <p>この対象にするかしないかというのは決まっているんですかね。その辺も含めて1回整理して、また教えてください。</p> |

| | |
|--|--|
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>他によろしいですか。 では、他になければ採決を行います。 議第56号 令和3年度（2021年度）熊本市教育委員会事務事業点検評価報告書《令和2年度（2020年度）事業分》について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。 (異議なしの声) ご異議なしと認めます。議第56号については原案のとおり決定いたします。</p> |
| <p>[採決] 【原案どおり承認された】</p> | |
| <p>・議第62号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について 《田端文一 熊本博物館長 提出理由説明》</p> | |
| <p>西山忠男 委員</p> | <p>この協議会はどれぐらいの頻度で開催されるものなのか、具体的にはどんなことを審議しているのか教えていただけますか。</p> |
| <p>田端文一 熊本博物館長</p> | <p>開催の頻度につきましては、毎年度3回程度開催をしております。 中身につきましては、事業の計画、それから事業の報告、それと私ども博物館側の諮問によりましてそのときそのときの議題をお出しして意見をいただいております。そういったことになっております。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>他にご発言があればお願いいたします。 よろしいですか。 では、他にご発言がなければ採決を行います。 議第62号 熊本博物館協議会の委員の移植について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。 (異議なしの声)</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>ご異議なしと認めます。議第62号については原案のとおり決定いたします。</p> |
| <p>[採決] 【原案どおり承認された】</p> | |
| <p>日程第4 報告</p> | |

・報告(3) 市立高等学校・専門学校改革基本計画に係る必由館高等学校提案について

《城野実 必由館高等学校校長・竹山祥平 必由館高等学校前生徒会長 報告》

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。
議論に入る前に少し確認したいことがあるので、教えてください。

今、大きく3つあったかと思うんです。アンケート結果と生徒会の案と、あと、この学校提案という。この学校の提案ということは、そもそも生徒会の意見とかもあったけれども、この3番が学校としての全体の意見だということによろしいですか。

城野実 必由館高等学校校長

いえ、まだ一応は先日の教育委員会会議の中で、生徒の案と教職員の案を聞きたいということでしたので、まずは話し合っています生徒の方向性と教職員の提案として、今日は提案させていただきます。

遠藤洋路 教育長

これは学校の提案ではなくて、教職員の提案ということによろしいですか。

城野実 必由館高等学校校長

はい。

遠藤洋路 教育長

分かりました。
今後の進め方としては、またそれを学校としての案にまとめるということとされるということによろしいでしょうか。

城野実 必由館高等学校校長

はい、今後ですね。ちょっと時間を、夏休みに入っておりまして、今日も、実は竹山君は課外がずっと入っておりまして、5、6時間目抜けてきていて、この後また4時45分からの課外に戻りますという状況で。生徒のほうは夏休みで、執行部との話し合いは8月にできるんですけども、それを踏まえて生徒に同意を求めるためには9月1日を過ぎないと生徒が揃わない状況にありますので、9月の提案になるかもしれません。

遠藤洋路 教育長

学校としての提案というのは校長の責任でまとめるものになるかと思うので、校長としては今後どういうスケジュールで進めたいということでお考えなんでしょうか。

城野実 必由館高等学校校長

今の生徒の意見というものを生徒とも話し合っ、生徒会執行部と職員と同窓生、この案でいいという了承が得られましたら、8月の教育委員会会議で提案できればと思いますけれども、生徒の最終的な同意というのが9月1日の始業式になると、という思いはあります。学校としての案としてまとめる部分をどうと言われたところで、生徒と相談して日にちは設定したいと思います。今は、私としては結論が出せていません。8月の教育委員会になるのか、9月の教育委員会になるのか。すみません。

| | |
|--|---|
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>分かりました。 じゃ、まだ今後のスケジュールは確定しないけれども、8月の教育委員会会議か9月の教育委員会会議に学校としてのまとまった、生徒の意見を踏まえたうえでの案を出す。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長 遠藤洋路 教育長</p> | <p>同窓会の意見も。 同窓会の意見も含めた提案として出すということですかね。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長 遠藤洋路 教育長</p> | <p>はい。 分かりました。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等 学校前生徒会長</p> | <p>それと、すみません、もう1点、今度は生徒会のほうに伺いたいですけれども、アンケート結果と生徒会の案というのが2つあって、2つ違う案ですよ。アンケート結果は基本的に現状のままにしてほしいという意見が大半でした。だけど、生徒会としては少し、36人ですけれども、そういう案をつくったということで、これはどちらが生徒の総意になって、意思だというふうに考えたらいいでしょうか。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等 学校前生徒会長</p> | <p>まず、全校生徒のアンケートを取ったときは、1、2、3、4、それぞれの項目において意見があるので、私たち生徒全体の意見としては、7ページの教育委員会が示す基本的な姿勢のところにあります抜本的な改革は望んでいないというところ。今のままの必由館高校がいい、普通科を残してほしいというのが私たち生徒の総意になります。 しかし、先生方にも伺ったことなんですが、ビジネス専門学校や千原台高校では既にもう改革がスタートしているということを知ったので、もしどうしても変えていかなければならないのであれば、こういった意見がどうだろうかというこれからの方針が、先ほどまとめたほうでの意見になりますので、生徒の総意としては、抜本的な改革は望んでいないというところになります。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>分かりました。 どうしても変えていかなきゃいけないならば、というのは、誰かに言われてしょうがなくやるんだっただけという、そういうニュアンスなのかもしれませんが、どちらかという私たちとして聞きたいのは、どうしても変えていかなきゃいけないのかどうかを、どう考えているのかというところが、生徒の意見を聞きたいところなんです。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等 学校前生徒会長</p> | <p>私は、アンケートを取る際に全校生徒の皆さんに放送でも呼びかけをしたりしたんですけれども、そのときには、改革自体は、変わっていくこと自体に反対はしていないというふうな思いを伝えて、だけど、この変わっていくスピードというか、変化していくかたちとして、今回は例えば1,080人から人数の削減は640人だったり、急激に減ったりするので。そうい</p> |

| | |
|-------------------|---|
| | <p>った部分で急激な変化は望んでいません。時間をかけてゆっくり変化していくことが大事だと思うので、今は私たちが望んでいないという現状にあるので、今後、もう一度生徒の声をたくさん聞いていただいて、どんどんどんどん時間をかけて、先ほど校長がおっしゃったように、例えば令和9年からの中学校の設立だったり、私たちは時間をかけてこれからゆっくり変わっていくことを望んでいます。</p> |
| 遠藤洋路 教育長 | <p>分かりました。 アンケート結果は現状維持だけれど、未来永劫現状維持してほしいということではなくて、少しずつ変えたいという、そういうことでしょうか。</p> |
| 竹山祥平 必由館高等学校前生徒会長 | <p>そうです。はい。 私は、前生徒会長で、現生徒会長にこの間代わりまして、今の生徒会長も、今、必由館のためにたくさんの活動をしてれています。今後、その生徒会長も次に託して、それも次に託して行って必由館を守っていくのはその当時の生徒になっていくので、今後、私自身が卒業して大学生になって、今の生徒会長もそういうふうにどんどん時間も進んでいくけれども、そのたびに必由館にいる生徒に対してその思いを酌んでいただければ幸いです。</p> |
| 遠藤洋路 教育長 | <p>分かりました。 生徒もだんだん変わっていくので、そのときそのときの生徒の意見があるのでそれを聞いてほしいと、そういうことですね。分かりました。 では、ただ今報告がありました。本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。</p> |
| 西山忠男 委員 | <p>お気持ちはよく分かりました。変わりたくないというのは、中にいけば当然そうだろうなとは思いますが。ただこの改革の議論が出てきた背景には、やはりここにも出てきます少子化という背景があって、それに伴って定員割れしているコースなどがあるから、やはりもう少し魅力的なあるいは特色のある学校にしていかないと将来立ち行かなくなるのではないかと危機感があるんだと思います。それはご理解いただいていると思うんですよね。実際に国際コースは定員割れしているんですよね。 それで、教育委員会としてはもっと魅力的な教育機関として附属中学校をつくり、中高一貫教育、それからグローバルコースというかたちにして人を集めようという案になったんだと理解しているんです。これからも今のままでやっていけるのであれば何もそんな面倒くさい改革までなくていいわけですが、今申し上げましたように、将来懸念されるという部分がありますし、定員割れしているという現状もありますので、やはり何らかの手を打たなければいけないということはお理解いただきたいと思います。ね。 校長先生が出されてきた教職員の案のほうを見ましても、定員は多少減りますけれども、あまり中身は変わっていないと、</p> |

城野実 必由館高等学校
校長

むしろ国際コースをなくすようなかたちに見えますよね。それが中心で、総合探究コースというのが、国際探究というのもありますけれども、どちらかという教育委員会が出している改革案とは逆方向、グローバルな方をなくして、あるいは比重を小さく普通科の比重を大きくするように見えるわけですが、それでやっていけるのであればそれでもいいと思いますけれども、そのあたりの見通しはどうなんでしょうか。

すみません、私の伝え方が悪かったのかもしれませんが、教職員のほうとして見れば、今の普通科という意識はありません。この普通科の新たな普通教育を主とする学科という部分と、先ほど途中で言いましたI S I Fとかの世界大会に出ているとか、いろんなところでグローバルなこともやっているし、SDGsの関係というのも現在取り組んでおりまして、その部分については選択制にはなりますけれども、その中でしっかり探究活動中心の学校にシフトチェンジはしていきたい。

ただ、今、原案にある、最初に説明したように学校設定科目を55単位つくらなくては新たな別なその他の学科としては申請できないので、学校設定教科の25単位の1単位当たり35時間のこの875時間分の授業計画がなければスタートを切れない、その提案ができない。

ですから、この新たな普通教育を主とする学科であれば、探究を2単位ずつと学校設定科目を2単位分、まずつくれば新しい学科がつかれる。そこで先ほど言ったように服飾デザイナー、生活デザインコースであればそういうフィールドワークをするような探究を、特別な地域としての連携、芸術コースにしてみれば、先ほど音楽の慰問とか、書道で書道パフォーマンスをしていくとか、そういうふうな地域等に根差した特別な学校設定教科というのを入れていくと。

そこで、そういう探究活動の中でしっかり地域と連携していけたら、順次、探究活動にシフトチェンジしていける教科は新しくなって、それについても対応できるようになってきた段階で、探究の時間を増やしていこうと思っています。

ただスタート時点で25単位全部準備するというのが現実的ではないということで、ちょうど答申を出されたときには、まだこの新たな普通教育を主とする学科が文科省のほうから提案されていなくてつくれなかったのが、今年の3月、施行が変わったので、その中でつくれるようになったので、これで一段階置いて、そこで探究というものを丁寧にやっていながら、学校の中では探究の時間を今後増やしていったら、最終的に25単位というのは難しいかもしれませんが、3年生の選択の中では15単位ぐらいはしっかり探究の活動ができるような学校にしていこうという思いです。

西山忠男 委員

お話はよく分かりました。

学校の中でのお話は分かるんですけども、外から見たときに要するに受験生を集められるかという問題がありますので、私が懸念するのは、今の3ページの案では、外から見たときにあまり変わっているように見えない、そこが心配だということをお話しているわけなんです。25単位揃えられないとなか

| | |
|---------------------------|---|
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>なか難しいという話は分かるんですけども、そこを工夫しないと、名前が変わっただけで今とあまり変わらないんじゃないかと思われてしまうと思うんですけども、いかがでしょうか。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>自分たちの中で、確かに外にアピールするものは少ないのかもしれませんがけれども、実際、現状として見て倍率は県内で2番目の状況である、普通科の状況がある状況で、大きく変えることのほうが倍率の低下を心配しております。別な普通科じゃない学科にすることのほうが普通科に進学したいという熊本県民のこの間のパブコメの中にもあったように、普通科の定員を減らすことに対してどうするのかとかいう意見もありましたけれども、そこを考えたうえで、普通科が熊本市内から必由館高校と千原台高校で400人分の定員がなくなる、熊本市から。国際コース、千原台の国際経済コースと必由館高校の360で400人の普通科枠が減ることに対して、パブリックコメントで課題として挙げられていましたので、私たちとしても、新たな専門学科の探究学科ではなく、その思いも踏まえたうえで、普通科というもののほうが倍率とかそういうものは維持できるんじゃないかと学校では考えております。</p> |
| <p>西山忠男 委員</p> | <p>分かりました。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>今のご質問に関連して、1つ質問なんですけど、新しい教科書が令和4年6月ぐらいにしか届かないので、学校設定科目がそれからしか検討できないということなんですけれども、学校設定科目というのは他の既存の教科の教科書を使ってやるという、そういう前提なんですか。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>学校で学校設定科目を今、うちも生物基礎で学校設定科目をつくって現行の学習指導要領でやっています。それは教科書と生物の時間のほうを使って、教科書のこのページに対応することで設定教科として申請してつくって、実際にそれぞれの、確かに学習指導要領に書いてある中身を全て行えばいいんですけども、それがどこか抜けがあるかという不安があるので、同等の既存の教科書の中からこういうところをちゃんと授業していく1時間1時間の計画を立てて、1単位当たり35時間分の授業計画をつくらなくてはいけないので、先ほど特別支援学校のほうで学校の一般図書と教育図書という2つの選定がありましたけれども、高校の場合も同じように教科書がないものについて一般図書、今言った生物の時間だったり、それを代用するということの提案とかもここで議決をもらわないと、それでそれを一般図書として使えるのかどうかすら決まらない状況なんです。それを申請していくのにどれを基本にやるのかというの考えていくということです。実際に数Ⅲはまだ、私が数学なので、数Ⅲは文言を見ていっただけでどういう中身だというのは分かるんですけども、今の地歴探究とか国語の新しい教科に関しては、全く中身が文科省のほうからも何も出てきていない状況なんです。ですから、その見本の教科書ができて初めて、このあたりを通常はやっていけるんだというの</p> |

| | |
|---------------------------|--|
| | <p>分かって、これを類似する学校設定教科としてこちらが何かを提案して教育委員会に認めてもらわないと学校設定教科になり得ないというかたちになりますので、元々の基本的な見本本がないと考えづらいということです。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>今のご説明は、学習指導要領はもうできているということですね。ただ学習指導要領を見ただけじゃどんな中身なのかよく分からないから教科書を見てから検討したいという、そういう理解でよろしいですか。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>現行の生徒がいる中で、そこを自分たちも調べながら準備するのは難しい。見本本をベースに考えないと難しいということです。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>学校設定科目というのは、探究的なものを多分想定しているんじゃないかと思うんですけども、探究というのは、1時間1時間、教科書1ページごとに対応していないといけないというのが探究的な学習というのは少し矛盾するように思うんですけども、そこはいかがでしょうか。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>改革推進課に調べてもらっていると思うんですけども、今の学校設定教科とか学校設定科目については、1時間1時間分を出さないとだめになっておりますので、35時間分どういう授業をするというのを出しています。うちが今、学校設定科目としている生物基礎に関しては4単位ですので、2年生の2単位の70時間分と3年生の70時間分こういう授業をしますという授業計画を提案して認められて、学校設定教科としてやっています。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>それは学習指導要領には対応している必要がある、教科書のページ、1ページ1ページに対応している必要はないと思うんですけどという。そこらあたりの教科書がないと組み立てるのが難しいということですかね。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>すみません、現行の授業をやるんならそこを調べていくというまでの余力がないと。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>分かりました。 他にご意見はありますか。</p> |
| <p>苫野一徳委員</p> | <p>まずは、前生徒会長の竹山さん、皆さんの意見をまとめて持ってきてくださってありがとうございました。 皆さんからこういう声が出たということ自体が、本当に自ら考えてきて行動に移すという姿そのものだなと思って、私はとても感激していました。高校生、大したものだなと、素晴らしいと。これは本当に心からそう思っています。 私が思うのは、今進んでいることがみんなビジョンをちゃんと選んでいないなというふうに思うんですね。もうちょっとそれを丁寧にすり合わせながら対応したほうがいいかなという気がしています。というのも、いきなりこういう案がばんと下り</p> |

てくると、これは何のために、どういう姿、どういうビジョンなのかなというのが分からないままに字面だけ取ると、附属中学、定員を削減してしまう、何だそれは突然寝耳に水だみたいになると思うんですよね。それは当然だと思います。

ただ同時に、どういった良いビジョン、活性化するようなビジョンがあり得るのかということをもっと丁寧に交換したほうがいいかなと思って、先生方も委員会の皆さんも。というのは、これはアメリカでデリバラティブポールというのがあるんですけれども、日本語では熟慮的投票というのかな、対話的投票というのか、何か投票するときに何の情報もなく、いきなりあてがわれたアイデアをもってこれについて投票してくださいと言われるのと、それについて徹底的に対話をした後で投票するのでは全く違うんですね、結果が。

その専門家の意見を聞いたり、メリット、デメリットを知った、みんなが理解したうえでものを考えていくのでは、全然結果が違うんですね。今はそのデリバラというのが、熟慮的・対話的な時間がなかったなという感じがしています。それはもう皆さんがおっしゃるとおりだと思うんです。だからビジョンを1回共有していただいて、そのことの大事さ、例えば高校生の皆さんは、今、自分たちが経験している高校以外知らないんですよね。だからこれを変えてどんないいことがあるのかというイメージが湧きにくい。例えばここで探究をやったときに、例えば自分に不利になるというか、そういうような意見がありましたけれども、これはそうじゃない実例が山のようにあるんですね。この改革検討委員会の委員でいてくださった荒瀬先生、堀川高校の元校長は、堀川高校というのは堀川の奇跡というのを起こした探究科というものを一番初めに高校でつくって、そのことで進学については格段に上がったと、そういうことがあるんです。探究というものを1年生のときからどんどんやることで、学ぶ意味が分かり、学びの楽しさを掴み、その探究というものをベースにしながら自分の学力も上がっていく、こういう実例というのがごまんとあるんですね。あるいは有名な隠岐島前高校という離島の奇跡と言われたのも、もうこのまま島は衰退していくんじゃないかということで教育魅力化プロジェクトというのが始まりました。島の資源を生かしながら島の様々な問題を高校生たちがどんどん解決していく。学校づくり、まちづくりを高校生たちがやっていくんですよね。その魅力化プロジェクトの中で人口が増えるんですよ。ここが面白いぞと人口が増える、そんなことがあると。こういった実例を多分高校生の皆さんはほとんど知らないと思うんですよね。こういったことを交換したいんですよ。丁寧にみんなで知ってあるいは熊本市でも遠藤教育長をはじめ、何度も上映会をやったHigh Tech High（ハイテック・ハイ）というアメリカの州高のドキュメンタリー、これも探究しかない話ですけれども、貧困層が約半分にもかかわらず、探究メインでやっていったらとんでもない進学実績になっていく。そういった実例をまずみんなで知って、こういうふうにしていけばものすごく活性化するかもしれない、楽しいかもしれない、みんなわくわくするかもしれない、そういう情報をたくさん我々でみんなでシェアをしたうえで話し合わない、この改革案自体が

| | |
|---------------------------------|---|
| | <p>単なる絵に描いた餅だったりとか、みんなが納得しないままでずるずる進んでいくなという感じを私は受けました。</p> <p>皆さんはこのアンケートを聞いて、こちらで何かを変えようと言われたら、普通は嫌なんです。誰だって嫌なんですよ。みんな現状維持したいんですよ、普通は。でももっと楽しいことがあるかもしれない、こうしたらみんなもっとわくわくするかもしれないというものが目の前に出されたらどうなのか。さらにそこに自分たちのもっといろんな意見を言う、みんなで意見を言い合って対話を重ねながら学校のビジョンをつくっていければ、またちょっと変わってくると思うんですよ。</p> <p>そういう意味で、私は今回の皆さんのご意見、先生方からのご意見を聞きながら、丁寧にビジョンから一緒に共有しながら、わくわくするような改革案を一緒につくっていく必要があるんじゃないかなと。そういう機会をつくっていけないかなというふうな感想を持ちました。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>それに関しては何かありますか。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等学校 学校前生徒会長</p> | <p>本当にそのとおりで思っております。私たちとしても、アンケートの結果であったように、私たちとしては現状のままがいいということで、何かを変えて未来のビジョンに対してもっと良くしていこうという気は私たちとしてはなくて、私たちは現状に満足している状況であります。</p> <p>そんな中でこの改革案が発表されて、私たちとしては今でいいのにどういうメリットがあるんだろうというところを考える時間とそれを考えるだけの材料というのがもう少し欲しかったかなという部分で、今、こうやってたくさん改革素案の中にも改革のメリットというのがたくさん載っていましたが、私たちとしては、それが逆に今の必由館の良さが失われてしまうんじゃないかという部分で懸念を抱いたので、これから今おっしゃったように、私たちと教育委員会の方々の両者が納得できて、熊本市にとって、必由館にとってすごくいいビジョン、すごくいいかたちになっていけるような話合いの機会をこれからつくっていただけるのであれば、それは本当にありがたいと思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>生徒会に関して特に難しいなと思うのは、先ほども竹山さんもおっしゃったけれども、自分たちはこう思うけれども、自分たちは卒業しちゃう、次の人が入る。なので、すごく冷たい言い方をすれば、私がいる間は現状維持でいいけれども、あとのことは知らないよという、そういうふうになりかねないですよ。そうならないように、ただ自分たちがまだ入ってきてもない人たちの意思決定を縛るわけにもいかないということで、その難しさというか、自分たちが卒業した後のことにどういうふうに責任を持って議論するのかというところが、もし私が生徒会の立場だったら非常に悩ましいところかなと思うんですけども、そこに関してはどういうふうにお考えですか。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等学校 学校前生徒会長</p> | <p>それは僕もすごく悩んだところではあったんですけども、実際に今回アンケートを取ったのが1、2、3年生というかた</p> |

ちで、私たちが卒業した後に学校に一番長く残るのは今の1年生になって、私たちが意見を聞いたのは一番長く学校に入れる人たちでも1年生の意見だけだったけれども、こうやって代替わりして行って、代替わりしていく生徒会長がその都度その都度入ってきた人に対して、今の現状に対してどうか、そのときそのときによってある学校の姿だったり、必要な改革だったりというのは変わってくると思うので、今回のこういう活動だけに限らず、今後もずっと継続して行って、常に必由館と教育委員会のほうで情報を交換したり、今はこういうふうにしたらいんじゃないだろうかとかいう意見を、交換できる機会を代が替わっていったとしてもその都度その都度用意していけば、それに関しては大丈夫なんじゃないかなと思います。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

学校を何か新しいことをつくる、変えるということは毎年毎年できるわけじゃなくて、少なくとも3年とか5年とか、場合によっては10年かかる、だからこうやろうといったときの人たちと5年後の人のそれができるようにするときの生徒というのは全然違う人たちになってしまうので、そうやって継続的に意見交換しながら必要なところは修正して行ってというのは現実的な方法なんだろうなというふうには確かに思います。おっしゃるとおりかなと思います。

ただ一方、教員の人たちは、多分5年とか10年とかいらっしゃる人もいるし、教育委員会は4年ごとに委員が変わる、任期があったり。市議会4年ごと、市長も4年ごとになったりする。だんだん人が変わって行って、生徒会だけではなくて、みんなも。それが5年後に私たちと今全然違う人たちが担当しているかもしれない。こちらもそうです。生徒会だけではなくて共通の課題としていかに継続的に現状を反映させるかということとはとても難しいけれども、大事な課題ですので、そこは決して決して生徒会だけではなくて、同じような課題を私たちも持っていくということで、今言っていたような継続的な意見交換というのはすごく大事なのかなというふうに思います。ありがとうございました。

小屋松徹彦 委員

生徒さんのアンケート結果をいろいろ見させていただいて、メリット、デメリットいろいろ書いてありますけれども、いや、本当にいっぱいいいことが書いてあるなど。特にメリットのところを見ると、非常に夢があってスケールのある意見が結構多くて素晴らしいなと思ったんですね。

こういうデメリット、メリットを出したその結果に、じゃ、その2つを踏まえて結果が今のままでいいという結論というのはいらないな。確かに今学習をしながら、その上にこういう難しいというか、大きな課題を検討するというのは、時間的にも大変だろうなと思うんですけども、ただ逆に考えると、自分たちの学校を改革するんだ、変革するんだという、そういうことができるチャンスというのもめったにないのかなというふうに思うんですね。だから大変ですけども、自分たちの学校をどうしようということを、メリットを見ると、いろんな意見がまた出てきそうな気がするからやめてほしくないな

| | |
|--------------------------|---|
| | <p>と、もう少し苦勞してほしいなと思うんですよ。 それで、確かに1年、2年、3年、変わっていきますけれども、先ほど出ていたように何とか継続していく、そういった部分が大事だろうと思いますけれども、本当にこの意見を聞いていると、いい意見がいっぱい出ているので、これをそのままじゃなくてももう少し膨らませていくということをやしてほしいし、ほかにも熊本には小中一貫校と実際に始まっているところがありますよね。ああいうところがどういう状況なのか、あそこの生徒さんたちと意見交流をすとか、そういったことを市が全国の事例ももう少し見てみると、またちょっと違ういろんな考えが出てくるかなという気もするので、ぜひもう少し長い目で検討していく、そういうことを生徒さんの中でやってほしいなと思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>小屋松委員、これは。</p> |
| <p>小屋松徹彦 委員</p> | <p>これは希望です。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>他にどうでしょうか。 よろしいですか。出川委員、どうでしょうか。</p> |
| <p>出川聖尚子 委員</p> | <p>生徒さんが短期間にアンケートを取って、意見をまとめていただいて、生徒さんの思いが伝わってきました。今、生徒さんが書かれているアンケート結果から、今の学校について満足しているということがわかりました。今回の必由館高校の学校編制がスタートにはなっていますけれども、今後、必由館高校がより良くなるために、今、学校の中でどういう課題があるのかを考えてみると、また違ったかたちで学校のあり方が考えられると思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>ありがとうございます。 生徒会からは。</p> |
| <p>竹山祥平 必由館高等学校前生徒会長</p> | <p>いろんな意見を聞いて、私は今日この対案としてこれをつくってくることが間に合わずに、生徒の意見を集約しての報告とかたちになりましたが、今後、生徒の対案をつくっていく作業に入っていくと思います。それに私が関わっていけるかどうかは、次の生徒会長がメインになっていくので、そのかたちがどうなっていくかはその生徒会長のやり方で変わってくると思いますが、今おっしゃっていただいたように、現状の生徒は今のままがいいという人が多かったけれども、今よりもっとよくなるのであればそれに反対する生徒はいないと思うので、今後、対案を作成していく中で、じゃ、必由館にしかないメリットをつくっていくためにはどうしたらいいだろうかと。中高一貫にしろ、反対だけじゃなくて、じゃ、メリットはどうだろうか。これからたくさんの時間をかけて話し合いの日程とかにもありますが、今回、長くしっかりと議論をしていって、今後、生徒にしか出せない、そういった意見を今後つくって対案として出せばいいなと思います。</p> |

| | |
|-------------------------------|--|
| 遠藤洋路 教育長 | 出川委員、よろしかったですか。 |
| 出川聖尚子 委員 | どれぐらいの時間がかけられるかとかあるかと思うんですけども、振り返りということがスタートになるかなと思いますので、自分たちでしっかり考えるということが続けていただければと思います。 |
| 遠藤洋路 教育長 | 次の生徒会長さんは、これは見ているんですかね。というか、今日は来られてはいないのかな。どうですかね、今日の議論は引き継がれるんですかね。 |
| 竹山祥平 必由館高等学校前生徒会長 遠藤洋路 教育長 | はい。引き継ぎます。 分かりました。 他にいかがですか。 |
| 菅野一徳 委員 | <p>先生方や生徒さんにいろいろとご負担をかけてしまうかもしれないので、ジャストアイデアですので、ご返答いただければということなんですけれども、物事を変えるというのは、何か本当に問題意識を持った一部の人に関わるんですよね。生徒さん皆さんの声を聞くのはとても大事だと思うんですけども、その全員が責任を持った思考をし、責任を持った行動をしているかということ、もちろんそうじゃないんですよね。それはどんなことでもそうですよね、何かを変えるという話でいうと。</p> <p>今の教育委員会全体もそうですよね。ほとんどの人が現状維持を希望するんですけども、一部の人本当に大きな問題を発見し、このままじゃまずいと、だから変えていこう。熊本市で見てもそうなんですけれども、熊本市全体で何を問題と思っているか、気づいている人、気づいていない人といういろいろというわけです。気づいた人が行動を始めるわけです。大体20%ぐらいが変わっていくと社会が変わっていくといいますけれども、20%ぐらいが動き始めるかですよね。そういうことを考えると生徒さんたち全員の声を聞くのはとても大事だし、これから続けていくべきだと思うんですけども、この改革に関して責任ある生徒さんたちが一体何人いるか。これに対して絶対反対だ、絶対許さない人たちでもいいし、何か面白いことができるんだったらちょっと関わりたいという人でもいいので、今度の生徒会長さんたちを中心としたかもしれませんが、何か有志の方たちで話し合えないかなという気がするんです。そういった本当に何かこれにコミットしたいという方、無責任じゃなくて、自分が何かに関わりたいよという人がもしいらっしゃれば、今度生徒さんが集まられるのが9月になってしまうということなので、ちょっと時間がかかっちゃうので、それも本当に現実的に可能かどうか分からないんですけども、生徒さんたちと私たちや事務局なんかと、そのときにたくさん材料をみんなで共有したいなど。</p> <p>例えば中高一貫で今こんなに活性化している例があるよとか、探究を中核にしているとこんな面白いことをやっている学校があるよとか、何か映像を見ながらやったり、そういったビジョンをある程度共有するという時間があると、こういった機</p> |

| | |
|---------------------------|---|
| | <p>会が継続的に今後も続けば、先ほど教育長もおっしゃったように、何かしらのかたちで当事者の先生方や生徒さんたちと対話を重ねる必要があると思うんですよ。そういう一定の文化の仕組みのようなものをつくっておくと、今後も継続的に立ち返れますよと、私たちが何がしたいんだというときに、私はもう一回立ち返るよりも対話の場を持ってみるとか、そういうものをちゃんと計画的に仕組みで置く、そういうことをもしかしたら丁寧にやっていく時間を、どうなんでしょうか。設けられないのかなというところですね。思ったんですけども、実現可能性はちょっと今は度外視して言っています。いかがなものなんでしょうか。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>これは主に学校の日程にもよるかなというふうに思いますので、何らかのかたちで、先ほど竹山さんからもありましたけれども、意見交換していくという、議論していくということを継続的に、8月、9月かどうか分かりませんが、一応そういうのをつくるということは必要だと思います。日程調整は、それはまた別途できるかと。</p> |
| <p>泉薫子 委員</p> | <p>おっしゃったようにやはり現場の子どもたちと共有認識というのは大事かなと思ったんですけども、それと同時に現場の先生方も同じようにそういう認識を共有していかないと、分かってもらっているのかどうかということが非常に危惧されますので、それはぜひとも一緒に話し合っていく必要があるなというふうに感じました。いかがでしょうか。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>本当に私、実際に学校としては中高一貫を除いたところは全て方向は受け入れているつもりなんですよね、探究を中心にやっていると。ただスタートが違くと。でも将来としては同じところに向かっているという提案をしているつもりなんですけれども、それが、説明が下手なのか伝わらずに、学校としては何も変わらないようなイメージで話があることが少し残念でして、その説明の部分で、私たちの中でもいろんな話合いをしていく中で、メリット、デメリットという話も当然やったんですけども、また、教育委員さんですとか、そういう新たな学校、実際に先ほど言われた民間のやつも実際に指導があったときには見に行っていて考えているし、だから環境を変えなくちゃいけないということで、今年、SDGsの探究学習というのも丁寧にやっていて、今3年の竹山君なんか、1年生の修学旅行のときからいろんなSDGsとか、そういうものに対してクラスで発表したりやってきていて、学校でやっていることがもう少し変わっているんだぞとか、それを踏まえたうえで学校としてはスタートが25時間の探究は必要と。ただ準備ができれば探究に必要だと思って、実際に基礎学力だけが全てではない、探究をして本人が動けるようになったほうが、学力が上がるという認識も共通的に持っています。でも令和5年度にスタートするには時間が早過ぎる、何も準備ができないという思いです。</p> |

| | |
|---------------------------|---|
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>今、教職員の意見と生徒の意見と両方あって、それが違うわけですよ。城野校長は学校の意見だと言いながら、教員の意見をおっしゃっていたので、そこが学校の意見なのか、教員の意見なのか分からないんですよ。学校というときには当然生徒も入っている、全部学校としての責任者としての校長の意見だと思うんですけども、今おっしゃったのは生徒も合意している学校の意見だということではないんですよ。そこは学校と教員と生徒と、その多分ご説明のときの使い分けがはっきりしていないので、今おっしゃったような誤解というか、伝わらない部分があるのかなと思うんですけども。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>申し訳ありません。 私として話していたのは、教職員の思いとして、もし途中で学校という表現をしたのかもしれないけれども、教職員のほうとしては、今後、生徒にも、同窓会にも教職員の案というのは示しますので、その中で同じようにやっという、同窓会とはその役員さんたちと意見交換になると思いますけれども、そういう中で学校の案を出すべきなんだというのはあるんですけども、これは生徒会と話し合いの時間を持たないと学校の案には変わっていかないので、時間を置かなければということです。</p> |
| <p>泉薫子 委員</p> | <p>生徒さんが今の学校を変えたくないということをおっしゃるということは、非常に良い教育をされているんだと思うんですね。そういった今やっている教育をさらに伸ばすという考えということであったり、さらにまた良くしようというふうな考えであったりということを教師の方々が不安に感じていらっしゃるということであれば、生徒さんにもそういったことが伝わっていくのではないかなと思うんですが、そういうところの共通認識でしたり、話し合いでしたり、そういったことも必要なのではないかなと思います。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>すみません。城野校長、学校の案をまとめるというふうに、校長は教職員の管理者でもあるけれども、生徒も一緒に含めた学校全体の責任者でもあるので、両方のかたちがあるので。教員の代表として意見をおっしゃっているのは教員の代表としてでいいんですけども、私たちとしては、学校全体の責任者としての意見を最終的には聞きたいということになっています。そのどっちの立場でおっしゃっているのかがはっきりすれば、よりこちらの話を受け止めやすいかなと思います。できれば生徒も含め、同窓会も含め、保護者も含めた学校全体の代表者、責任者としてのご意見を最終的には聞きたいというふうに思うんです。まとまるのかあるいはまとまるために時間がかかるのか、やっていったけれども、まとまらなかったのか、それはそれで結果ですからいいと思うんですけども。そういうことで、次回、いつか、8月なのか、9月なのかという話もありましたが、次回はぜひ教員の代表じゃなくて、学校全体の責任者としての意見を聞かせていただければありがたいかと思いません。</p> |

| | |
|---------------------------|---|
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>すみません、今日は、スタート時点で学校の説明をするときに学校の説明と言いましたけれども、生徒の意見と教職員の意見の説明をさせていただきますと冒頭で言った部分で、学校の案として今回提案しているわけではありませんので、時間をかけて学校の案として提案させていただきます。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>苦野委員、先ほどおっしゃってるように、どうなんでしょう。学校の案をもうまとめちゃってから教育委員会と議論したほうがいいのか、学校の案をまとめる過程で議論したほうがいいのか、どっちかなと。</p> |
| <p>苦野一徳 委員</p> | <p>ありがとうございます。 今、校長先生おっしゃったように、私も先生方がこれに全面反対というふうには理解していませんでした。現実的なところを踏まえてというふうなことなので私もよく分かっていたつもりで、私は主として生徒さんたちに語りかけたというか、生徒さんたちとぜひお話ししたいなというふうに思ったということを先ほど申し上げさせていただいたんですが、そしてまた、今、教育長がおっしゃっていただいたように、学校としての意見をまとめる際に、あるいは生徒さんたちにより詳細な情報が共有できるように、その前に一度と言わず二度三度でもいいんですけれども、そんな無責任なことを言えませんが、そういった場があったほうが、二度手間、三度手間もなくなりますし、いいんじゃないかなとは思っているんですけれども。</p> |
| <p>城野実 必由館高等学校 校長</p> | <p>実際に生徒全員というのは無理なんだろうけれども、執行部とか、有志の生徒に丁寧に委員会からこういうメリットがあるんだとか、そういうことを話していただいた後に学校の意見というのをまとめたほうがいいと私も思いますので、時間をいただければと。</p> |
| <p>遠藤洋路 教育長</p> | <p>分かりました。じゃ、そういう場をぜひつくりましょう。</p> |
| <p>西山忠男 委員</p> | <p>先ほどの校長先生のご説明を聞いてちょっと混乱したんですよね、私は。校長先生は総合探究コースの性格について、将来的にはこちらが提案したグローバル探究科のような内容にしていくんだというお話をされましたけれども、その前には、普通科をなくすということに対して抵抗を示されましたよね。普通科は1.5倍の倍率があるし、千原台もなくて、うちもなくしてそれでいいのかというようなお話をされたので、私はこの総合探究コースというのは普通科的な性格のコースなんだろうと思っていたんですけれども、そうではないとおっしゃるので、その辺の理解が多分食い違ったので、議論が混乱しちゃうのかなと思うんですね。 やっぱり問題は、生徒さんたちは普通科を残してほしいとはっきりおっしゃっている。だからそこが焦点になると思うんですね。その気持ちはよく分かるんですよ。普通科は潰しが利きますよね。取りあえず普通科に入って将来どういうものに進もうかというどこにでも行けるというメリットが確かにあるんですよね。だから普通科は1.5倍を維持しているという面があ</p> |

遠藤洋路 教育長

るんですが、将来もそうなのかなというところを私たちは心配しているという意見です。そこが議論の根底にあるんですけども、生徒さんの意見と、それから総合探究コースという提案もちよっと違ってしますので、その辺を整理しないと議論が進まないというふうに感じました。

今、教職員の案の大きな根拠として、今の倍率は高いからということがあると思うんですね。今の倍率は高いけれども、将来も倍率を維持するために変えたほうがいいという意見がもともと原案なんです。今の倍率は高いし、今のものを維持したほうが将来的にも倍率が高いんじゃないかということが今の教職員の方の案なんですけれども、どちらも、もしそれで倍率が下がったときどうするかということがやっぱりあって、現状維持でいきますと現状維持して5年後に倍率が下がったから、やっぱりそのときに改めて改革しますという、もうそれが実現するのは10年後とかになっちゃうわけですね。だから先を予想していくことができないということで、もちろんそれは私たちも先が見えるわけではないし、教員も生徒も先が読めるわけではないので、どっちの予想が正しいかということは、そのときにならないと分かりませんが、もし思いどおりにいかなかったときどうするかということも、それは改革案として考えておく必要があるでしょうね。それは今聞きながら思いました。今、現状に近いかたちでいくことにしても、大きく改革するにしても、それでうまくいかなかったときにはどうしますか。そこはある程度の共通認識を持っておかないとこの先に進むのは危険なような気はします。

私が思うのは、1点、さっきも少し言いましたけれども、生徒の提案の中の7ページに、抜本的な改革はしないで今のまま必由館がいいということがまず、生徒の意見としてはあるんですけども、しかし、どうしても時代の変化とともに変えていかなければならないならこうです。教職員の案に関して、率直にいうとそういうことがあって、別に望んでいるのか、望んでいないのかというのは分からないけれども、何かやらなきゃいけないんだったらこうですねみたいな、何となく若干受け身な感じがするんですね。

じゃなくて、変えなきゃいけないんだという意識なのか、変えなくていいんだけど、教育委員会がどうしても変えろというからやるのか。そこは、そこを最初に決めれば、そこだけ決めれば、もう後はどういうかたちにするかというのは結果の問題なんですよ。変えなくてよいというのであれば変えないようにしましょうということで決めればよいし、いや、やっぱり変えなきゃいけないよねということだったら、まずその認識を共有するということが必要なので。いや、どうしても変えなきゃいけないんだったらどうですかということを知っているわけじゃないし、私たちもそれをしたいわけでもない。教育委員会が変えなきゃいけないと言っているわけじゃないんですよ。そこをまず、変えなきゃいけないのかどうかという議論をするのが一番最初なのかなというふうに思います。

変えなきゃいけないのかどうかは、さっき苦野委員が言いましたけれども、誰も分からない、正解があるわけじゃないの

竹山祥平 必由館高等学校前生徒会長

で、5年後、10年後にしか結果は出ないので。変えなきゃいけないかどうかというところの合意ができれば、あとそこから先はそんなに難しくないような気もしますけれども、いかがですか。

あくまで生徒の意見になりますが、抜本的な改革は望んでいないので、私は今のままでいいというふうに思っています。私たち生徒とすれば、今の現状に問題意識を抱いていないので、この改革を教育委員会の方からこういうふうな改革をするよというのを聞いたのが最終的に私たちもこの活動をするきっかけだったので、この活動に対してリアクシヨンのなふうになってしまうのは仕方ないのかなと思っております。私たちはこういう意見を全校生徒で集めたので、望んでいない、望んでいません。

しかし、私たちとしては、望んでいないのにいきなり教育委員会のほうから変えるよという意見が来たから、私たちとしては、これは変えなきゃいけないのかなというふうに思うのはリアクシヨンのになるのは必然なのかなと思うので、その中で妥協案というか、私たちは今のままがいいが、それで変えなければいけないのであれば、今後議論がもっと必要だと思うんですけども、現状だとこれぐらいがいいと思うという妥協の案なので、私たちとしては変えることは望んでいないというかたちになります。

遠藤洋路 教育長

なので、私たちは妥協案を望んでいなくて、変える必要があるかについてどう思っているのかを聞きたいところが主なので。そこで、数合わせみたいな中途半端な案は別に必要はないので、変えなくていいなら変えなくていいので、今の必由館のこういうところがいい、だから残してほしいということをお願いしたいんですね。そこら辺も議論ができる部分かなというふうに思います。ただその意見と教員の意見がまた少し違うということでしょうから、そこは本当に私たち教育委員、学校の中で議論が今後必要なのかとは思っています。

どうもありがとうございます。

苫野一徳 委員

1つご理解いただきたいと思うのが、突然教育委員会から降ってきたように感じられたかもしれないんですけども、改革検討委員会をやっているときにご存知かとは思いますが、必由館の生徒さんも委員にいらしたんですよね。それから学校の中で多様な機会を設けて皆さんの意見を聞いて、それでそういったものを吸収したうえでこの答申を出したといういきさつもあるので、皆さんを完全に無視をしてやったというつもりは私たちにはないんですよね。だからその点をご理解いただきたいなど。もしかしたら不十分なところがあったかもしれないんですけども、そのことにはご理解いただけたらと思います。

南弘一千原台高等学校校長

まだ必由館の議論の途中なんですけれども、今の議論をずっとお聞きしてまして、私としては、苫野委員が最初に言われたところが非常に、本当だなと思いました。

と申しますのが、我々の学校も同じなんですけれども、この改革のビジョンというものをしっかり我々教職員、生徒、そういったところを含めて理解をするという場、そういったところをしっかりと設けていくということが私自身の反省も含めまして、必要だというふうに感じています。

本校としては、令和5年のスタートということで、今やり始めていまして、教育課程の編成を現在、先日の検討委員会でも進めました。本校とビジネス専門学校ですね。そういったものを進めていく中でも、やはりその教育課程を実践した後にはどうという生徒が育つのか、どういふふうな学校の授業風景が変わっていくのか、そういったビジョンを我々が職員にも、生徒たちにも示しながら進んでいくということが非常に大事だと思っております。苦野委員のような学識経験者の方々に入っていたいで、「これを進めるとこういふふうなことがあるんだよ」といふようなことを示していただける機会があれば、必由館だけではなく、本校も一緒に共有させていただいて、そういったものをつくっていきながら、ビジョンを共にしながら進めていくということは必要になってくると思います。

もちろん時間的な制約はございますので、どのぐらいの頻度でそういったことができるか分かりませんが、今の議論を聞きながらそういったことを思いましたので、発言させていただきました。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

当然、市立高校と専門学校の改革ですから、必由館だけじゃなくて、もちろん千原台とビジネス専門学校のほうが先行してやっただけしている。そこはより丁寧に進めていくということは当然ですので、今日は議題になっていませんから直接言及はしていませんけれども、必由館でこういうことが必要だということは、当然千原台と総合ビジネス専門学校にも当てはまるものは、そのほかの2校についても考えながら、取り入れながら進めていくということだと思っております。そこはご安心ください。

あと、先ほど苦野委員からもありましたけれども、今までの議論の経緯というものがあるので、そこを無視して全く突然出てきたという前提は、事実としてはそうではないので、そこは気持ちとしてはそうかもしれませんが、事実は事実として受け止めていただいて、そこは生徒の中でも、学校の中でも共有していただきたいなというふうに思います。

他によろしいですか。

竹山祥平 必由館高等学校
学校前生徒会長

伝達の部分に関して、先ほどおっしゃられたように、一応この改革案を作成する過程で私たちの先輩が委員会に参加されたり、ワークショップを以前行ったという話は、私はこの改革案に対して自分たちの意見をまとめている途中で知りました。そのため、意見を酌んでいただいた機会があったという事実は、私としても知っていましたし、私は一応そういうふうな機会をつくっていただいたんだなというふうにありがたい気持ちもあつたんですが、それを学校全体に伝達する機会というのが全くなくてという部分で少し伝達不足な場面があつたかなと私たち

遠藤洋路 教育長

も思ったので、そこは誤解しているわけではなくて、すみません、私もそこは申し訳ないです。

毎年人が変わっていくので、先ほど竹山さんがおっしゃったようにそれをいかに引き継いでいくかということがこれからも大事になってくると思いますので。私たちもそうですけれども、毎年毎年の継続性と、それから新しいことを取り入れていくという両方していかなきゃいけないと思うので、それができるように気をつけて、お互いにできればいいと思います。よろしく願いいたします。

他にいかがですか、よろしいですか。

では、ご意見も出尽くしたようですので、本件は以上といたします。

〔非公開の審議〕

日程第3 議事

- ・議第55号 令和2年度熊本市各会計決算について

《中元正人 教育政策課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第59号 財産の取得について

《上村清敬 健康教育課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第61号 和解の成立について

《上村清敬 健康教育課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第63号 和解の成立について

《川上敬士 総合支援課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第57号 職員の懲戒処分について

《濱洲義昭 教職員課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の日程は全て終了したので、令和3年7月の定例教育委員会会議を閉会いたします。